# 金剛石採取說話への一寄與

榎　一　雄

金剛石(又は他の寶石)を採取するに當つて、それが毒蛇の群聚する深谷にあるので、豫め崖上から多くの肉片を投下してこれに金剛石を附着せしめ、鷲がその肉片を啄んで舞上つた所を威して、肉片を置去らせ金剛石を採るといふ形式の說話は、Epiphanes (circa. 315-405 A. D.)、梁四公記、九世紀の中頃アラビヤ人の書いた「アリストテレスの石書」、マルコ＝ポーロ、劉郁の西使記等にそれぞれスキチヤ・拂菻・印度に於ける事實として傳へられてゐるが(それらの大體に就いては、B. Laufer, The Diamond 及び白鳥博士「西域史研究」下八〇三—八一五頁參照)、唐の段成式の酉陽雜俎(前集卷七)及びこれと所據を同じくすると思はれる唐書(卷二二一上西域傳天竺の條)にも、次の樣な說話を記してゐる。

王玄策○伽中天竺王阿羅那順、以詣闕、乘得術士那羅邏(一有婆字)婆、言壽二百歲、太宗奇之、館於金飈門內、造延年藥、(中略)言、婆羅門國有藥、名畔茶○佉(茶法)○水、(中略)又有藥、名咀頰、在高山石崖下、山腹中有石孔、孔前有樹、狀如桑樹、孔中有大毒蛇守之、取以大方箭、(射)枝葉、葉下、便有鳥鳥、銜之飛去、則衆箭射鳥而取其藥也、(酉陽雜俎、四部叢刊本)

有樹、名咀頰羅、葉如梨、生鷲山崖腹、前有巨虺守穴、不可到、欲取藥者、以方鏃矢射、枝則落、爲群鳥銜去、則又射、乃得之、(唐書)

術士那羅邏婆は、舊唐書(卷三・八四一九八)、唐書(卷二二一上)、資治通鑑(卷二〇〇)、續世說(卷九)、唐會要(卷一〇〇)、文獻通考(卷二三八)、太平寰宇記(卷一八三)等に諸種の書き方で示されてゐるが、那羅邏婆婆羅(※Nārāyaṇasvāmin)が正しいであらうといふ(Pelliot, TP, 1912, p. 376, 353; *Ibid.*, 1923, p. 278, 279, 281)。彼の延年藥は遂に成らず、本國に放還を命ぜられるに至つたが、その材料の一つだといふ咀頰(羅)の葉を採取するに就いて彼の物語つた所は、正に所謂金剛石採取說話の一類型でなければならない。

この說話の起源に關しては、アラビヤ乃至ヘレニスティック＝オリエントに求める說とインドに求める說とがあり、ラウファー氏は前說に、白鳥博士は後說に贊成して居られるが、酉陽雜俎や唐書の右の記事は、さうした說話が唐初の印度にも行はれてゐた一つの有力な證據であつ。